ふるさと農道緊急整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

末松遺跡（すえまついせき）

2017

石川県野々市市教育委員会

例　　言

1　本書は、末松遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地は、石川県野々市市中林二丁目及び末松二丁目地内である。

3　調査原因は、ふるさと農道緊急整備事業（野々市西南部地区）に伴うものである。

4　調査は、野々市町産業建設部（当時）からの依頼を受けて野々市町教育委員会文化課（当時）が実施した。

5　調査にかかる費用は、野々市町が負担した。

6　現地調査の年度・期間・面積・担当者は以下のとおりである。

	調査年度	調査面積	調査担当
第１次	平成８年	2000㎡	横山貴広（野々市町教育委員会文化課）
第２次	平成 12 年	600㎡	横山貴広（野々市町教育委員会文化課）

7　報告書執筆・編集は腰地孝大（野々市市教育委員会文化課）が担当した。

8　現地作業員は以下のとおりである。

井手和郎　伊藤忠行　猪又邦子　遠藤外茂義　大地時子　小野幸子　川村和夫　木下　光
栗山　久　古源きよ　小柳幹男　谷口初代　田端　実　紬美保子　寺本昭夫　徳田外喜栄
藤部純子　中川吉三　中川紀子　永田芳子　西本光江　羽土啓子　彦田洋子　宮川英子
南外志雄　谷内茂代　山岸吉男　吉本智子

9　出土品整理作業員は以下のとおりである。

野村祥子　竹田倫子

10　本書についての凡例は以下のとおりである。

(1) 方位は座標北を指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠している。
(2) 水平基準は海抜高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。
(3) 出土遺物番号は、本文・観察表・挿図・写真に対応する。
(4) 挿図の縮尺は図に示すとおりである。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。
(5) 土層図・遺物観察表の色彩注記は、『新版標準土色帖』に拠った。
(6) 遺構名称の略号は以下のとおりである。なお遺構番号については調査時のものを報告書作成段階で一部変更している。

溝：SD　不明遺構：SX　自然流路：NR

11　調査に関する記録と出土遺物は、野々市市教育委員会が一括して保管・管理している。

第１章 立地と環境

第１節 立地

野々市市は石川平野のほぼ中央に位置し、県南部を流れる手取川によって形成された扇状地（手取川扇状地）の扇央部から扇端部に存在する。手取川は幾度も流れを変えており、現在の七ヶ用水と総称される流路はその名残を示すものであるといわれている。七ヶ用水の１つである郷用水の中流域にあたる本遺跡の位置する末松地区は市南西部にあり、西側は白山市に接する。

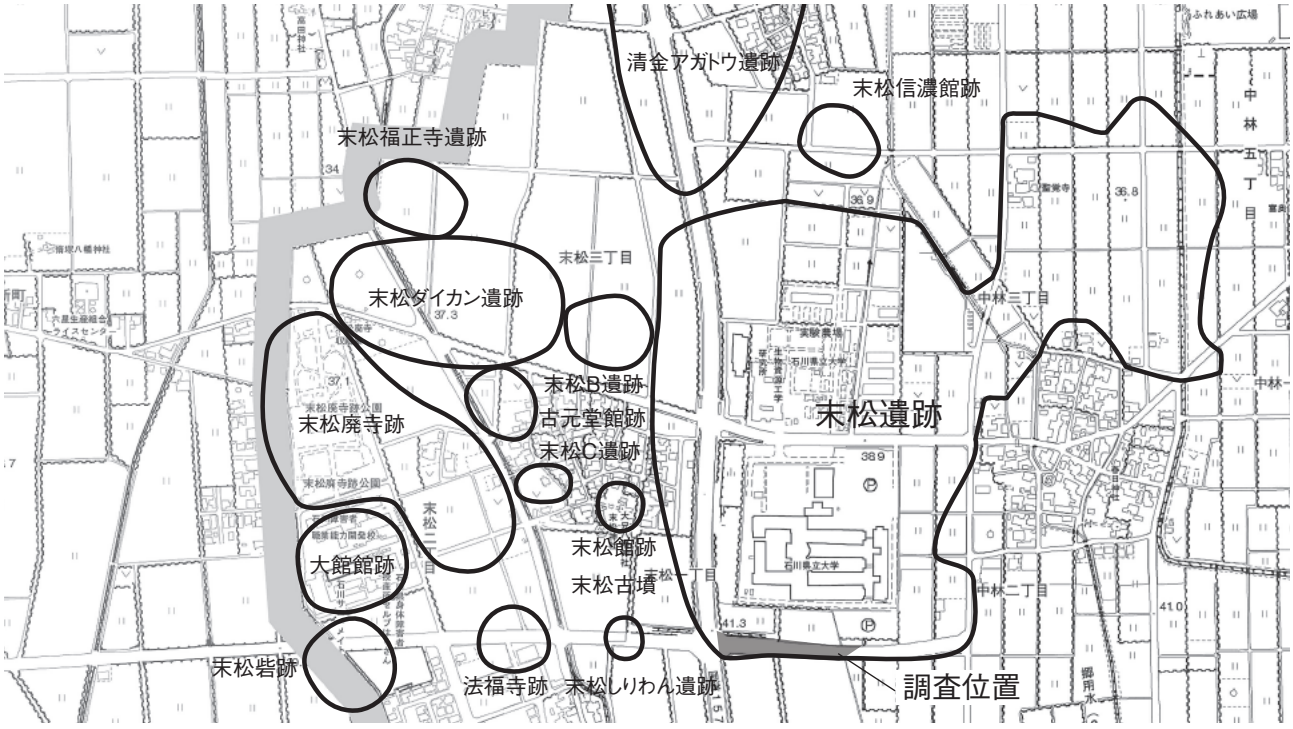
手取川扇状地の扇央部では、南北に伸びる島状微高地上に遺跡が分布している。末松地区においても清金地区から白山市の安養寺地区にかけて古代以降の遺跡を中心に分布しており、市北部の御経塚地区と並び市内でも遺跡が密に分布する地区である。

第１図 野々市市位置図

第２節　歴史的環境

末松遺跡周辺の歴史的環境については周辺の調査報告（柿田ほか 2005）及び野々市町史に詳しい。詳細はこれらに譲りここでは概要を述べるにとどめる。

縄文時代から弥生時代までの遺跡は、手取川扇状地の扇端部を中心に集落が形成される。末松遺跡周辺では北西に約 2km はなれた長竹遺跡や乾町遺跡などで縄文晩期の遺構及び遺物がみつかっている。古墳時代においても、市北部では御経塚シンデン古墳群などの古墳及び集落が展開するが、扇央部における



第２図 周辺の遺跡

開発は未だに進んでいない。

7 世紀後半に入ると手取川扇央部において急激に開発が進む。その象徴ともいえる末松廃寺跡は、7 世紀後半に創建された北陸地方最古の寺院であり、昭和 14（1939）年に国史跡に指定されている。また末松遺跡の既調査地点では竪穴建物群がみつかっており、そこから複数系統の土師器煮炊具が出土していることから、扇央部の開発を進めた移民が形成した集落であると指摘されている（柿田ほか 2005）。

中世以降については北に近接する清金アガトウ遺跡や約 1㎞北西に位置する粟田遺跡などで 13 世紀頃の集落がみつかっている。野々市市北部の扇が丘ハワイゴク遺跡や長池キタノハシ遺跡などで集村の様相が明らかになっているが、末松遺跡周辺では対照的に散居村というべき様相である。

第 2 章 経緯と経過

本報告書で報告する平成 8 年度及び平成 12 年度に実施した末松遺跡の発掘調査は、いずれもふるさと農道緊急整備事業に起因するものである。

平成 8 年度は 9 月 17 日付で野々市町産業建設部農産課より発掘調査の依頼を受け、9 月 26 日付教文第 126 号により実施する旨を回答した。また 9 月 24 日付教文 50 号により文化財保護法 98 条の 2 第 1 項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知を文化庁長官宛に提出した。

発掘調査は野々市町教育委員会文化課が実施し、横山が担当した。10 月 1 日より現場作業を開始し、12 月 16 日に空中写真測量を実施した。その後補足調査及び埋戻しを行い、翌年 1 月 17 日に調査を終了した。

平成 12 年度調査区については、平成 11 年度に分布調査を行い調査が必要となる範囲を確定した。この結果をもとに平成 12 年度に 5 月 1 日付で土木工事等のための発掘通知が県教育委員会へ提出され、5 月 17 日付教文 432 号により発掘調査を実施する旨回答を受けた。これを受け 6 月 27 日付教文第 78 号により発掘調査報告を県教育委員会へ提出した。

発掘調査は野々市町教育委員会委員会文化課が実施し、横山が担当した。6 月 7 日より作業を開始し、7 月 6 日までに全ての調査区の遺構掘削ならびに空中写真測量を行った。その後記録作業及び埋め戻しを行い、7 月 24 日に現地調査を終了した。

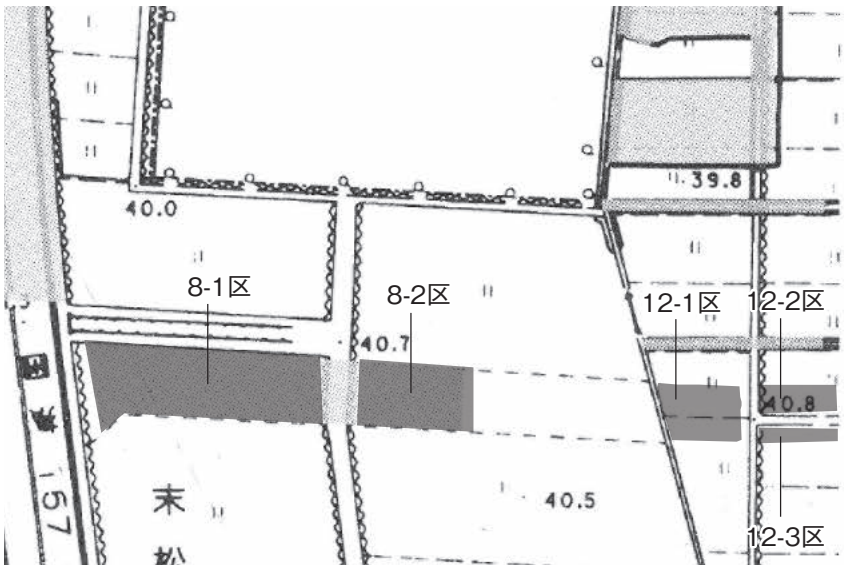
整理作業は横山が担当し、各年度調査終了後に遺物の洗浄、注記、接合及び実測を行った。平成 28 年度に腰地が再整理及び報告書作成を行い、平成 29 年 3 月に報告書を刊行した。

第 3 章 調査区と基本土層

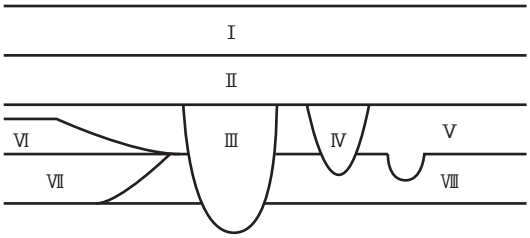
平成 8 年度及び平成 12 年度は農道を境として調査区を設定している。本報告では調査年度を頭に記し、8-1 区（西側）、8-2 区（東側）及び 12-1 区（西側）、12-2 区（北東側）、12-3 区（南東側）とする。なお、8-2 区及び 12-1 区の間は分布調査の結果、鞍部となっていると判断されたため調査対象としていない。

基本となる層序は上面から現代の耕作土（Ⅰ）及び床土（Ⅱ）、古代の遺物包含層（Ⅴ）、地山土（Ⅷ）であ

る。古代の遺物包含層は黒～暗褐色粘質土である。さらにこの包含層を切り込む中世の遺構が存在するが（Ⅳ）、中世以降の生活面は後世の耕作により削平されている。また 8-1 区西側では縄文時代晩期から弥生時代初頭の遺物包含層が存在することを確認した（Ⅵ）。検出面となる地山土は明橙色砂質土であり、8-1 区西側では粘性の強い淡黄色粘質土が主体となる。



第 3 図　調査区配置図



Ⅰ：現代耕作土
Ⅱ：灰色～灰褐色粘質土（床土）
Ⅲ：灰色砂質土（近代の河道）
Ⅳ：褐淡褐色粘質土（中近世遺構覆土）
Ⅴ：黒～暗褐色粘質土（古代遺物包含層）
Ⅵ：淡橙褐色粘質土（縄文～弥生初頭遺物包含層）
Ⅶ：淡黄色粘質土（粘性強い、無遺物層）
Ⅷ：明橙色砂質土（無遺物層）

第 4 図　基本土層模式図

第 4 章 調査区と基本土層

第 1 節 遺構

検出した遺構はピット及び溝が大半である。中世の墓と考えられる土坑（12-2 区 SX1 及び SX2）が存在するが建物跡は確認されていない。また遺構分布に粗密の差が認められ、8-2 区で検出した溝（SD6）より西側は遺構が急減する。

ピットのうち遺物が出土しているものはわずかであり、大半が時期及び性格を推定することが困難である。

ここでは SX1・2 及び溝について報告する。なお溝遺構の番号については、整理時に振りなおしている。

SD1

8-1 区西側で検出した。南側は調査区外に延びるが、北端は調査区北西角付近で捉えた。西に 45 度の方向にほぼ直線状に延び、幅 42cm、検出面から深さ 15cm である。断面形状は緩やかな弧を描く。遺物は縄文時代晩期から弥生時代初頭の土器片が 1 点出土しているのみである。

SD2

8-1 区の SD1 より東に約 20m に位置する。南北両端とも調査区外に延びる。SD1 とほぼ同方向に軸を取るが、北東側に緩やか弧を描き、西に 45 度から 60 度に軸をもつ。幅 32cm、深さ 34cm で断面形状は V 字型を呈する。遺物は土器片が僅かに出土しているのみであり時期は不明である。

SD3

8-1 区の SD2 の東側に位置する。軸は SD1 及び 2 とほぼ同様である。SD1 と同様直線的に延び、西に 55 度の方向に振れている。南北両端とも調査区内でとらえており、全長 15.5m、幅 61cm、深さ 7cm である。遺物は縄文晩期から弥生時代初頭の土器片が 1 点出土している。

SD4

8-2 区の北西隅で検出した。南西―北東方向に 45 度振れる方向に軸をとり、両端とも調査区外へ直線的に延びる。幅 106cm、深さ 30cm である。須恵器甕の小片が出土していることから、古代以降に比定される。

SD5

8-2 区の中央よりやや西側に位置する。南西―北東方向に 60 度振れ、北東端は SD6 に接続する。幅 108cm、深さ 28cm で、断面形状は緩やかな弧を描く。遺物は縄文時代晩期から弥生時代初頭の土器片が 1 点出土しているのみである。

SD6

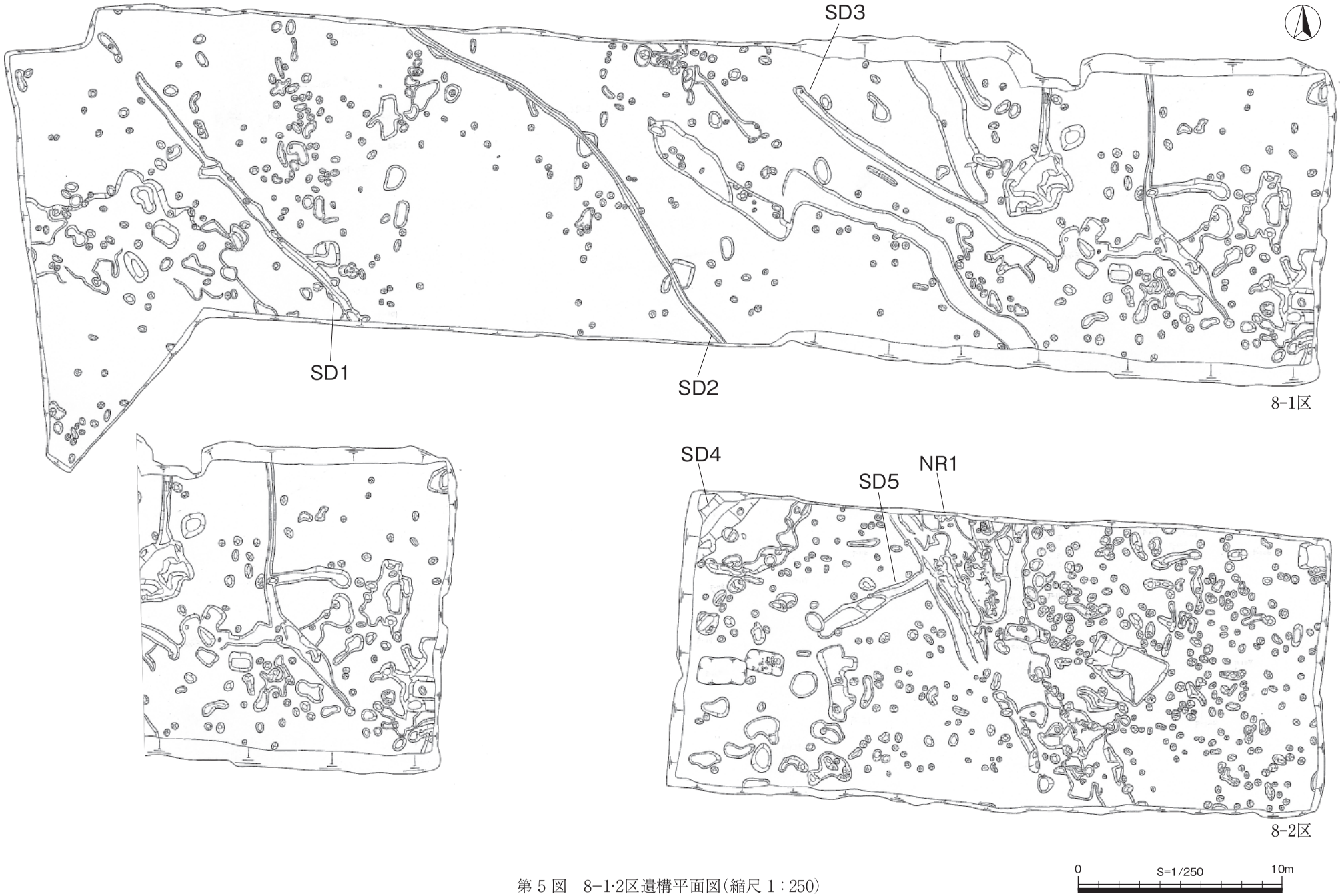
12-1 区東側で検出した。南東及び北西端は調査区外へ延びる。断面形状は緩やかな V 字状となる。幅 34cm、深さ 34cm。遺物は弥生時代後期から古墳時代初頭の甕の口縁部のほか土器片が数点出土しているのみである。

SD7

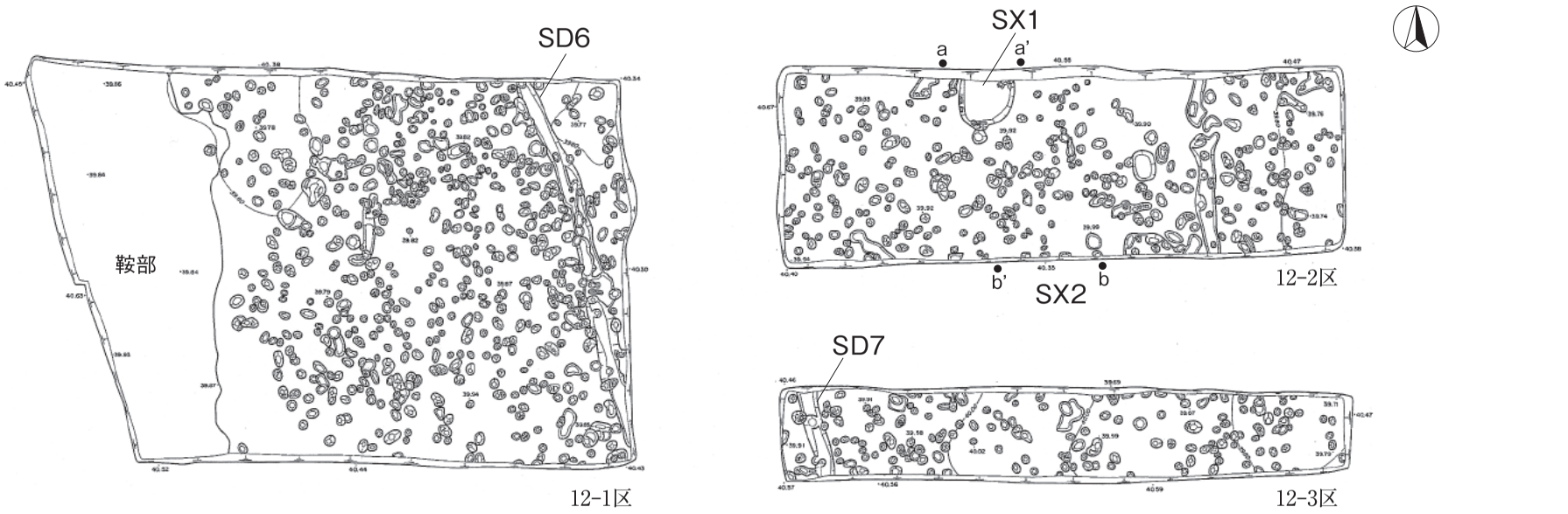
12-3 区の西壁際で検出した。幅 70cm、深さ 40㎝で、断面形状は台形となる。遺物は出土していないが、SD7 と軸方位及び底部のレベルがほぼ同じであることから同時期に設けられていたと考えられる。遺物は出土していない。

NR1

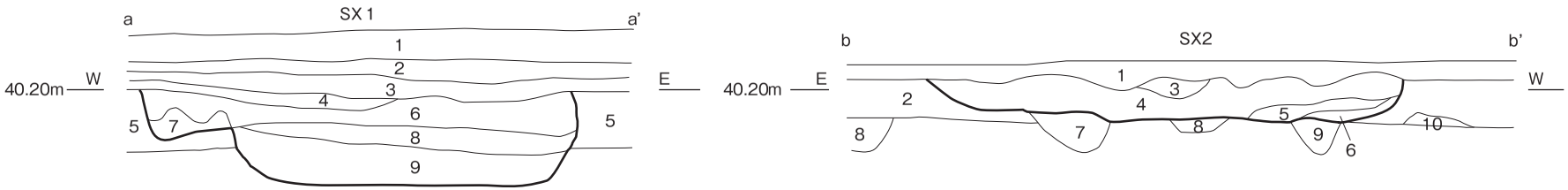
8-2 区の中央に位置している。南東―北西方向に軸をもち、調査区中央より北側は 2 条に分岐する。遺物に近世から近代の陶磁器を多く含むため近世以降の自然流路と考えられる。北側の底部が深くなることから北方向へ下るものであったと考えられる。



第５図　8-1･2区遺構平面図(縮尺１：250)



第 6 図　S12−1･2･3区平面図(縮尺1：250)



1　現代耕作土
2　淡灰褐色粘質土
3　淡黄灰色粘質土
4　淡灰褐色粘質土
5　暗灰色粘質土(包含層)
6　濁淡褐色粘質土(ブロック土多く含む)
7　小礫混じり暗灰色粘質土
8　淡灰色シルト(炭化物、骨片、遺物含む)
9　濁暗灰色粘質土(ブロック土多く含む)

1　淡灰色粘質土
2　暗灰褐色粘質土(包含層)
3　濁灰色粘質土(ブロック土多く含む)
4　濁灰褐色粘質土(ブロック土多く含む)
5　灰色粘質土(ブロック土多く含む)
6　灰色粘質土
7　黒色粘質土
8　小礫混じり暗褐色粘質土
9　暗灰色粘質土(ブロック土多く含む)
10 淡黄色砂質土

第 7 図　SX1･SX2断面図(縮尺1：40)

SX1

12-2 区で検出した。北側およそ 4 分の 1 は調査区北側に続くものの、南北 196cm 以上、東西 204m の南北方向を長軸とする楕円形をなす。底部は扁平で壁面にかけて緩やかに傾斜する。検出面からの深さは 23cm ほどであるが、古代の包含層を切る形で掘り込まれている。

覆土はブロック土を多く含み、底部付近の覆土には多量の灰が含まれている。出土遺物は珠洲焼の擂鉢（16）及び越前焼の大甕 2 個体（17・18）がある。2 個体の大甕は調査区北壁際で土圧に押しつぶされた状態で出土しており、大甕内部及びその周辺には炭化物及び微小骨片が散乱した状態で出土した。覆土及び遺物出土状況から 2 個体が埋納されたものであったと考えられる。時期は出土遺物より 14 世紀初頭に位置づけられる。

SX2

12-2 区南壁のほぼ中央で捉えたが、SX1 より掘り込みが浅く底部が検出面まで掘り込まれていないため平面形は不明である。東西 285cm、深さ 24cm と、SX1 より規模が大きい。SX1 と同様に古代の遺物包含層を切る。遺物は石製の行火（20）、白磁皿（15）、石臼（未掲載）が出土しており、SX1 と同様の時期に位置づけられる。

第 2 節　遺物

遺物は縄文晩期から近世のものが 2 年度分を合わせコンテナ 4 箱分出土している。そのうち主となるものは縄文時代の打製石斧、弥生時代初頭の柴山出村式期に比定される甕及び中近世の陶磁器である。ここでは 2 ヵ年度の出土遺物を時期ごとに概観する。

縄文時代～弥生時代

縄文晩期から弥生初頭の土器及び打製石斧が出土している。

晩期の土器は 8-1 区包含層及び 12-3 区包含層で出土している（図 8-1）。弥生時代初頭の遺物は柴山出村式期の甕が一括して出土している（図 8-2）。もとは 1 個体であったと考えられるが不足する部分が多い。基本土層 V1 層掘削時に出土している。図 8-3 は近世流路より出土している、大型広口壷の口縁部分である。

石器では打製石斧 8 点が出土しているが、完形品の出土はない（図 8-5 ～ 11）。うち 6 点が 8-1 区及び 8-2 区の包含層から出土している。図 8-5 は片刃のみ成形された未製品である。石材は火山礫凝灰岩が 5 点、角礫凝灰岩が 1 点、粗粒緑色凝灰岩が 1 点、砂岩が 1 点である。

古代

古代の遺物は須恵器片がわずかに出土しているのみであり、2 点のみ実測した。図 9-14 は調査区 2 の sp26 より出土した須恵器坏蓋である。9 世紀初頭頃に比定される。

中世～近世

中世の遺物は包含層中に僅かに含まれるものを除き 12-2 区の SX1 及び SX2 から出土している。図 9-15 は SX2 から出土した白磁皿である。内面及び外面の口縁部から体部まで施釉され、外面底部及び高台は無釉である。

図 9-16 及び図 9-17 は珠洲焼の片口鉢である。東側調査区包含層から出土した図 9-16 の口縁部は内傾し櫛描波状文がめぐる、15 世紀前半に属するものと考えられる。図 9-18・19 は SX1 から出土した越前焼の大甕である。後円部の形状が若干異なるものの、いずれも 13 世紀末～ 14 世紀初頭に比定されよう（木村ほか 2016）。

石製品では調査区 2 の SX2 より行火図 9-20 及び石臼（未掲載）が出土している。行火は軽石凝灰岩を刳り貫き前面が開口するものであり、14 世紀中頃から 15 世紀に帰属する。

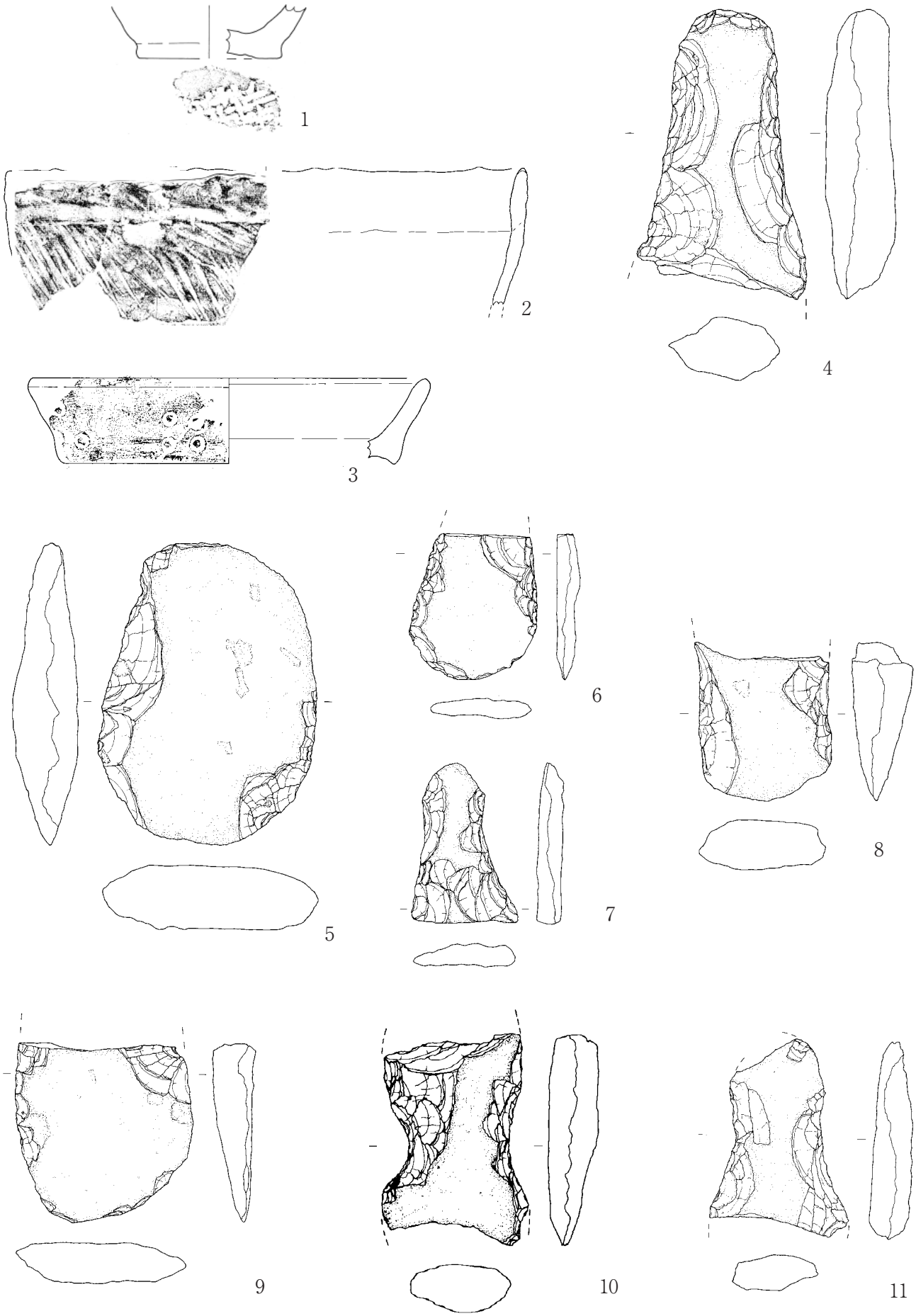
近世以降の遺物は陶磁器類が出土しており、大半が 8-2 区の NR1 より出土している。

第 5 章 総括

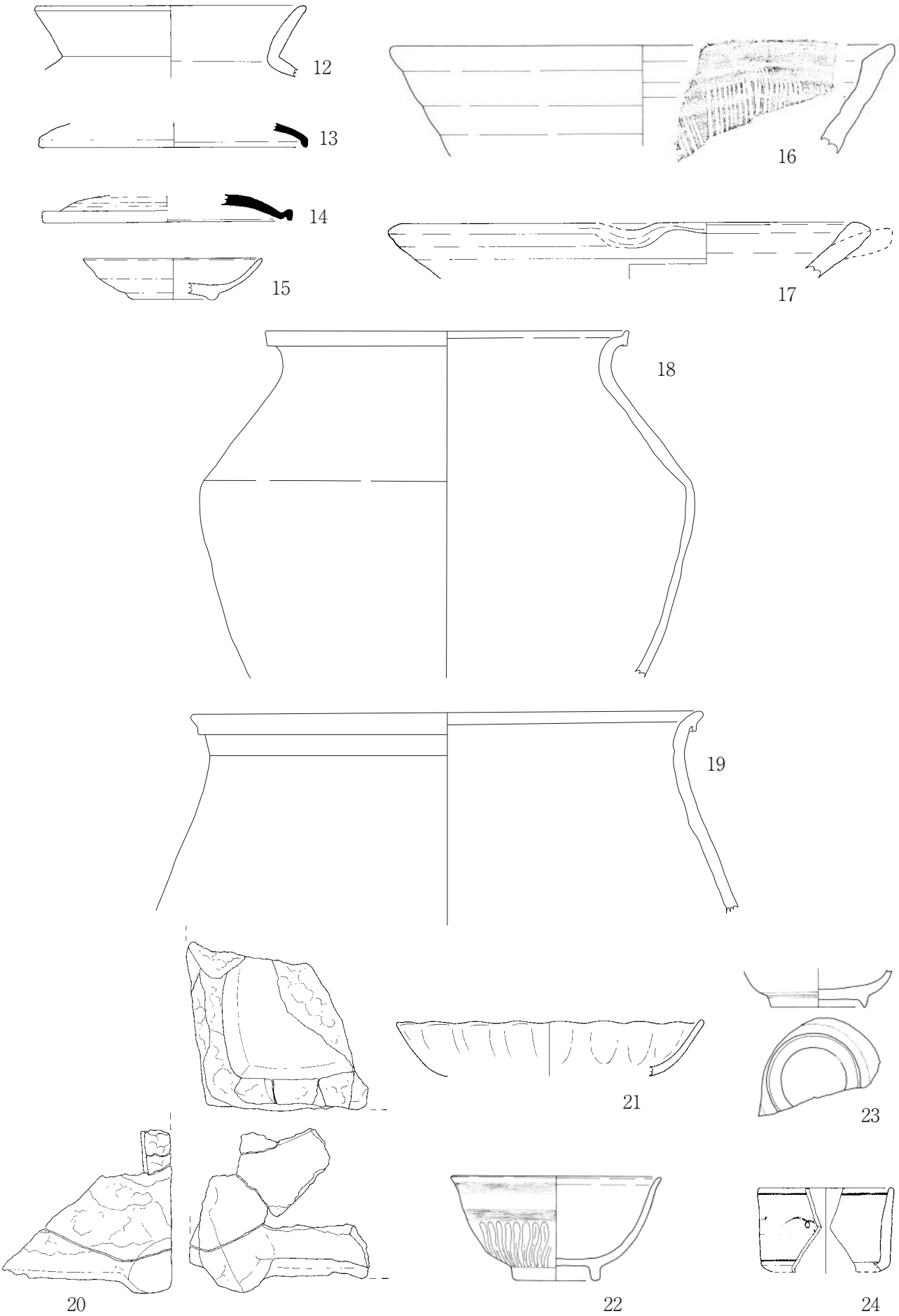
本書において報告した調査地点は島状微高地の縁辺部にあたり、住居址など生活の痕跡が認められなかったことから末松遺跡の集落域の中心から外れた地点であるといえる。石川県埋蔵文化財センターが調査地点の北側を平成 14 年度に調査しており、その結果南東―北西方向に延びる鞍部を確認している。本調査地点を含む鞍部の南側については遺構が希薄であることと整合する（山田ほか 2006）。

その中で縄文時代の打製石斧が複数出土しているものの当該時期の集落を認められない様相は、山本直人氏の分類する「第 2b 類型 : 単に根茎類、球根類を採集するためだけに営まれた遺跡」に該当するものと考えられる（山本 2013）。石川県埋蔵文化財センターが調査したなかでも同様の傾向が認められている（柿田ほか 2005）。また SX1 及び SX2 は火葬後の骨や灰をまとめて納めたものと考えられる。類例の検討は今後の課題としたい。

〈参考文献〉
柿田祐司ほか、2005、『末松遺跡 一般国道 157 号鶴来バイパス改築工事にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書』石川県教育委員会
木村孝一郎ほか、2016、『越前焼総合調査事業報告』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報 6、福井県教育庁埋蔵文化財センター
山田由布子ほか、2006、『末松遺跡 石川県立大学整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』石川県教育委員会
山本直人、2013『縄文時代の生業と社会』
野々市町史編纂専門委員会編、2006、『野々市町史 通史編』



第 8 図　出土遺物実測図(縮尺=1：3)



第 9 図　出土遺物実測図(縮尺=1：3　18・19 は 1：6)

第１表　遺物観察表

番号	区名	遺構	器種	口径（㎜）	器高（㎜）	底径（㎜）	調整（外）	調整（内）	色調（外）	色調（内）	残存率	備考	実測番号
1	8–1区	pit103	縄文土器 深鉢	—	—	80	ランダムな条痕	ヨコナデ			底部1/3	底部に網代圧痕	N6
2	8–1区	包含層	弥生土器 甕	—	—	—	ランダムな条痕	ランダムな条痕			口縁1/5	口縁部小波状、1重の指ナデ凹線がめぐる	N30
3	8–2区	近世用水	弥生土器 壺	222	—	—	ヨコナデのち竹管文	ヨコナデ	10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR3/1 黒褐色	口縁1/3		N9
12	12–1区	SD1	土師器 甕	154	—	—	ヨコ刷毛	ヨコナデ	10YR8/4浅黄橙色	7.5YR8/6浅黄橙色	口縁1/9		T2
13	8–1区	包含層	須恵器 坏蓋	154	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	N6/1灰	N5/1灰	口縁1/18		N5
14	12–2区	pit26	須恵器 坏蓋	144	—	—	ロクロナデ、ヘラ削り	ロクロナデ	2.5YR6/1黄灰色	2.5YR6/1黄灰色	口縁1/18		T9
15	12–2区	SX2	白磁 皿	102	20	52			胎土7.5YR8/1灰白　透明釉	透明釉	口縁1/36 底部1/6		N4
16	8–2区	包含層	珠洲焼 片口鉢	286	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	5Y6/1灰色	5Y6/1灰色		口縁部面取り後櫛描波状文	N20
17	12–2区	SX1	珠洲焼 片口鉢	276	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5YR6/1灰色	7.5YR6/1灰色	口縁1/9		T5
18	12–2区	SX1	越前焼 大甕		—	—							T
19	12–2区	SX1	越前焼 大甕	582	—	—			2.5YR6/4にぶい橙	2.5YR6/4にぶい橙	口縁2/5		T
21	8–2区	近世用水	近世陶磁器 染付　碗	18	—	—			胎土5Y8/1灰白	透明釉			N12
22	8–2区	近世用水	近世陶磁器 碗	120	59	50			胎土5Y8/1灰白	釉5Y5/4灰オリーブ	口縁1/6		N18
23	8–2区	包含層	近世陶磁器 染付　皿	176	—	—			胎土5Y8/1灰白	透明釉、口銹	口縁1/9		N27
24	8–1区	包含層	近世陶磁器 染付　筒形碗	78	—	—			胎土10YR7/1　灰白	透明釉	口縁1/6		N2

番号	区名	遺構	器種	最大長（㎜）	最大幅（㎜）	最大厚（㎜）	重量（g）	石　材	備考	実測番号
4	8-1区	包含層	打製石斧	163	96	40	550	火山礫凝灰岩		N21
5	8–2区	包含層	打製石斧	170	120	36	904	火山礫凝灰岩	未製品か	T24
6	8–2区	包含層	打製石斧	81	70	14	98	粗粒緑色凝灰岩		T22
7	8–2区	包含層	打製石斧	90	59	15	553	砂岩		N10
8	8–2区	包含層	打製石斧	890	775	340	251	角礫凝灰岩		T23
9	8–2区	包含層	打製石斧	111	100	24	263	火山礫凝灰岩		T25
10	12–1区	SK1	打製石斧	117	82	29	304	火山礫凝灰岩		T3
11	12-2区	SP24	打製石斧	110	78	23	193	火山礫凝灰岩		T7
20	12–2区	SX2	行火	—	—	27	298	軽石凝灰岩		T6

8-1区西側(南西から)

8-1区東側（東から）

8-2区北側（西から）

8-2区南側（東から）

12-1区（西から）

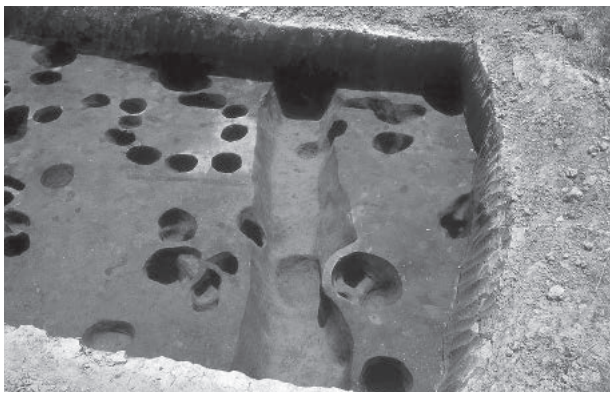
12-2区（西から）

12-3区（西から）

SD4完掘（北東から）

写真図版 1

SD6完掘（北西から）



SD7完掘（北西から）

SX1完掘

SX1 遺物18･19出土状況

SX2断面

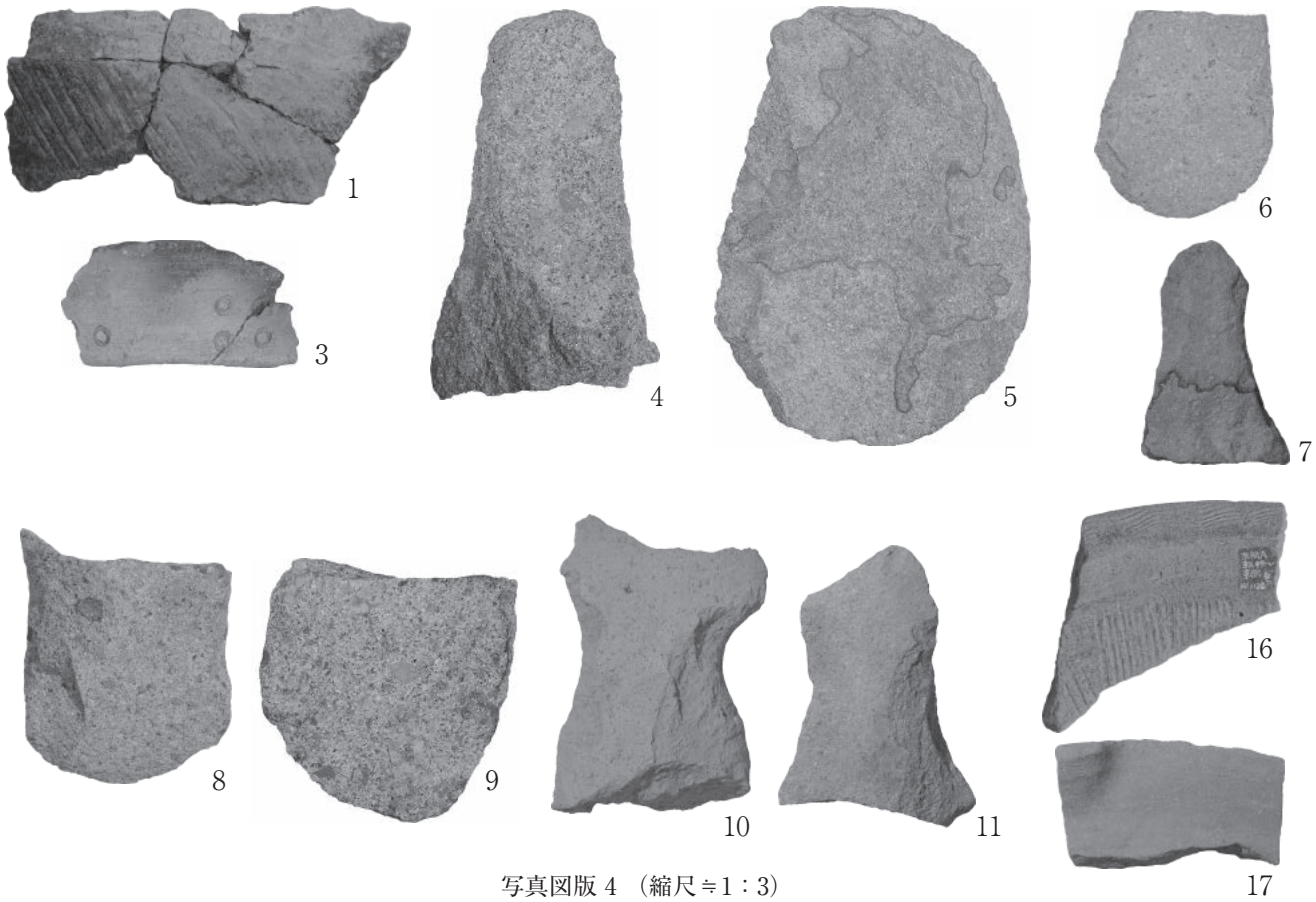
平成12年度航空写真
（東から。右奥に末松廃寺跡を望む）

写真図版 2

19

18

写真図版 3 遺物写真（縮尺≒1：6）



写真図版 4 （縮尺≒1：3）

報 告 書 抄 録

ふりがな	すえまついせき
書名	末松遺跡
副書名	ふるさと農道緊急整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	腰地　孝大
編集機関	野々市市教育委員会
所在地	〒921－8510　石川県野々市市三納一丁目1番地　　Tel:076－227－6122
発行機関	野々市市教育委員会
発行年月日	西暦　2017年3月29日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
スエマツ 末松遺跡	イシカワケン 石川県 ノノイチシ 野々市市 ナカバヤシ・スエマツ 中林・末松	17344		36° 30′ 28″	136° 35′ 43″	第1次:平成8年10月1日～ 平成9年1月17日	2000	記録 保存 調査
						第2次:平成12年6月7日～ 平成12年7月24日	600	
	種　別	主な時代		主な遺構		主な遺物		
	集落	縄文・弥生 中世・近世		溝7、土坑		弥生土器、須恵器、土師器、珠洲焼、 越前焼、中近世陶磁器、打製石斧		
要　約	集落の縁辺部。溝および中世墓の可能性がある土坑などを検出した。							

2017 年 3 月 29 日　発行

ふるさと農道緊急整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

末松遺跡

著作権所有　石川県野々市市三納一丁目 1 番地
発　行　者　野々市市教育委員会
印　刷　者　石川県野々市市矢作三丁目 18
高桑美術印刷株式会社